

Chapter 2

世紀の大科学者とまで言われた天才・浅香彩花。

彼女の住む大きな一軒家の屋上へ忍び込むのは雑作も無かった。周辺の建築物の構造を霧恵の探知機が既にスキャンしていた。

指定された方向へ向けてワイヤーを飛ばすと、先端の機械部が磁力を発生させ、壁に張り付き、霧恵を安全にそこまで引っ張ってくれた。

あとは、十六時三十分にガラスが割れる音を逃さなければ、霧恵はすぐさまそこへ飛び込み、浅香彩花を攻撃する。その後、予定通りに三階への階段を上るだけ――

そう思っていただけに、三つの誤差が霧恵の幼い心を揺さぶった。

一つ目は、十六時三十分に眩い光を放ち始めた広大な海。それはたったの一瞬だけ、霧恵の目を惹き付けた。しかしそれが姉からの合図で無い事が分かると、霧恵は再びワイヤーの先端を握りしめ、浅香邸のガラスが割れるのを待つ。

その時も、霧恵の頭の中にはあの、不思議な海の輝きが焼き付いて離れなかった。

約十五秒の誤差をもってガラスの碎け散る音を聞いた霧恵は、しっかりとワイヤーの持ち手を握り直し、もう片方の手にはしっかりと鈍器を持ち、屋上から飛び降りた。スカートが捲れてしまうのも、今だけは気にならない。蒸し暑い夏の空気を切り裂き、重力に身を任せて落下していくのは爽快だった。

緊張は無い。今までと同じ。言われた通りに行動するだけ。いつもと違ったのは、あの不思議な海の光景だけ。

真っ白い床の廊下へ着地すると、靴底がガラスの破片を踏みつぶす感触を味わいながら立ち上がる。それから、アルミの角材を両手に握り直すと、しっかりと正面を見据える。

ここに二つ目の誤差があった。そこには二人の人間が居た。そんな話を霧恵は聞いていなかったのだ。いつもなら、目的地にどのような人間が居るのか、全てが事前に知らされる情報と完璧に一致していた。

今日は、浅香彩花一人しか居ないはずだった。

霧恵はその男性の顔を見た。彼もまた、驚きを隠せない表情で霧恵のほうを見つめている。

全く予想外の状況に置かれながら、それでも霧恵は走り出し、浅香彩花に向かって飛びかかった。得物のアルミ材は霧恵の手によく馴染み、どれくらいの力を込めれば必要なダメージを与える事が出来るかが想像出来た。ただの金属の棒に見えて、この武器は霧恵の

ために細かい調整がされた相棒だった。表面の加工のおかげで、指紋が付く事も無い。そして霧恵は体重をかけ、浅香彩花の小さな身体を目がけてそれを振り下ろした。しかしそれは、彩花の身体に触れる直前で遮られた。

青年が呻く声が響き渡る。霧恵は、体勢を立て直してもう一度彩花に飛びかかることはしなかった。彼の重心がこちらに移動して来るのを霧恵は運良く察知し、慌てて駆け出す。あと一瞬だけでも霧恵がその場を離れるのが遅ければ、青年は霧恵の事を捕らえてしまっていたかもしれない。そう思うと、霧恵は全身に寒さを感じた。

霧恵は予定通り、階段を上る階へ駆け上がった。霧恵が三階に上ったのは、与えられた作戦の通りだった。

しかしそれから先の行動については何の指示もなかった。きっと、何か、逃げるための手立てがあるのだと霧恵は思っていた。しかし、三階の扉はどれも開かず、回りには無機質な壁しかない。どう考えても、ここから逃げる方法はなかった。

霧恵はすぐに、自分が聞かされた計画を頭の中で思い返す。浅香彩花を攻撃することには失敗したが、脱出の手だてについては間違いが無かった。全ての予定が上手く進んでいたら、ここから霧恵は何らかの方法で脱出することが出来るはずだった。

——見捨てられた？

その考えが瞬時に頭の中に現れて、霧恵は思わず泣きそうになる。

もともと、今回の計画は今までの妨害工作と違い、直接的に他人を——浅香彩花を傷つけるものだった。その上、霧恵に与えられた指示はどこか曖昧で、ガラスを割り飛び込んだあとと行動について細かな説明も無かった。それに予定外の要素がふたつ起きていたことも霧恵の不安を煽った。捨て駒にされたという以外に、この状況で考えられることは無いだろう。

見捨てられた！ 見捨てられた見捨てられた見捨てられた見捨てられた！

そう思うと、霧恵は耐えきれなくなり、とうとう泣き出してしまった。情けなく声を上げて。

結局、霧恵は助けられた。それも、打ち倒そうとしていた憎き浅香彩花の親族に。

それは間違いなく偶然によるものだったが、しかしそのおかげで、今こうして霧恵はゆったりとベンチに身を沈め、帰りの電車を待っている。

暑い。

夏の永い夕暮れが二人分の影をプラットホームいっぱいに引き延ばしていた。二つの細長い影はふらふらと揺らめいて重なり、一つになったり、また二つに別れたりしている。

「ねえ、どうしてこの駅は地下に無いんですか？」

疲れ果ててしまったのだろう、芳川霧恵は首元を伝う汗を拭う事もせず、制服のシャツが濡れるに任せている。ボタンをひとつ開け放ち、紺色のリボンタイはすでに外してしまっている。

「こんな駅、大して使う人間が居ないからだよ。わざわざ金かけて穴掘るほどの価値が無いんだ」

知也が答えると、霧恵は怠そうに首を回して、細長い無人駅の構内を見回す。二人の他には何の気配も無い。銀色の花が夕日を浴びて、網膜が焼き付いてしまいそうな光を放っているだけだ。

それにしても暑い、と知也は思った。

強烈な日差しに当てられて、思考まで溶けていってしまうような気がする。殺人を取り扱った映画の名作には夏を舞台にしたものが多いという話を聞いた事があった。熱に浮かされた身体で、人はみな狂気に身を任せたようにふらふらと近づき、その命を奪ってしまおうとする。その瞬間、きっと彼は全身に涼しい風を感じていただろう。しかし、全て終わってしまったえば、かえって酷い熱が身体を包み込んでいることに気付く。誰かに殴り掛かろうとするのが狂気なら、自分が何となく彼女の事を助けてしまったのも狂気に当てられたいだろう。全部、この暑さのせいなのだ、きつと。

霧恵は力なくベンチの背もたれに寄りかかり、鮮やかな夕日を力なく見上げていた。知也は脱水症状の可能性を疑ったが、だからといって彼女のために何かをしてやろうとも思わなかった。自分は財布も持たないまま家を出て来てしまったし、こんな辺境の地に飲み物の販売機など存在しない。

呼吸をするのも煩わしいのだろう。雨に濡れたように身体に張り付くシャツの裾から、霧恵の胸がゆっくり上下しているのだけが分かった。

「……おい、寝るなよ、一応お前、手配犯だろうが」

横の知也はそう言ったが、霧恵は知也の肩に頭を乗せるとそのまま眠りに落ちていってしまう。

知也はほんの数分前に起きた、あの夢のような出来事を思い出す。霧恵という少女がいま太股の上に載せている、艶のある赤いランドセル。その内部に仕込まれたオーバーテックノロジー。

あらゆる感覚に対して幻覚を引き起こす偽装化学の随。装着者の思い描く現象をリアルタイムに出力するジェネレーター。

あの時、霧恵は何を思ったか、きらびやかな衣装を纏った魔法少女になっていた。手に持っていたアルミの角材は、羽根のついたステッキに変わっていた。当然、触ればそれはステッキの感触になっているはずだ。

明らかにその格好は目立ちすぎていて、とても不法侵入&暴行の罪で現在逃走中の人間とする姿では無いだろうが、知也は別にそれで構わないと思った。

この機械が起動した時点で、知也は霧恵の勝利を確信していた。

——なぜなら、今の霧恵は文字通り、魔法が使えるのだから。

黒いスーツを纏った大男の集団が突入してくる。

霧恵がステッキを振ると、まるでアニメのエフェクトのように、そこからピンク色の、ハート型の光が放たれる。

言うまでもなく、その光は幻覚である。それが男たちに当たったところで、怪我をするわけではない。

しかし、ランドセルから発生する錯覚素子は、その光がぶつかった瞬間の衝撃さえ幻覚として引き起こしてしまう。つまり、身体が勝手に、堅いハート型の塊にぶつかったと思いい込み、痛みを感じ、衝撃を受けて後ろに吹き飛ぶ。

霧恵はがむしやりにステッキを振りハートを撒き散らし、道を切り開いた。

「逃げるぞ」

知也の指示に素直に従い、霧恵は階段を駆け下りる。

二階の廊下がちらりと見えたその時、知也は彩香がしゃがみこんだまま、こちらを見ているのに気づいた。一瞬、目が合う。

彩香は二人の顔をはっきりと見ていた。驚きを隠せないというように、ランドセルを背負ったふわふわとした衣装の少女と、その隣を走る知也の姿を。

それから二人はひたすら走り、この寂れた駅にたどり着いた。

知也がランドセルを開けて機械部に触れると、霧恵はもとの姿に戻った。ステッキは走っている途中で落とすってしまったらしいが、錯覚素子の影響から離れてただの金属の棒に戻ってしまったはずだ。

知也はぐੱつたりとベンチの背にもたれる。あれから追っ手は来なかった。……どうしてかはわからなかったが。

もう一度、芳川霧恵と名乗った少女のほうを見る。高校生だろう、夏服の制服を着込み、アルミナの花のように銀色掛かった髪は肩に触れるか触れないかというところで内側にゆるやかな曲線を描く。

彼女の白い頬に手を当てて、彼女を起こしてやる。電車が時間通りにやってくる機械音声のアナウンスが、どこかのスピーカーから流れてきた。

「……せめて、電車に乗ってから眠ってくれよ」

それから二人は、相変わらず他に乗客の見当たらない二両編成の電車に乗って都市の中央部へ向かった。

電車が終点に着くと、知也はまだ寝ぼけている霧恵にランドセルを背負わせ、小学生の姿になるよう指示する。
意識が朦朧としているのか、霧恵はすんなりと身体を縮ませ、幼い姿に変身することが出来た。身長百二十センチ強、細身、パステル色の子供服のセンスがやけに現実味にあふれているところを見ると、どうやら自分の小学生時代の姿をそのまま思い描いたらしい。知也がその小さくなった手を握ってみると、しっかりと柔らかな指に触れることが出来る。完璧な変装だった。

「……わ。ちょっと、触らないでくださいよ変態」
「変態だと？ 俺は命の恩人だぞ、これぐらい我慢しろ」
そう言いながら知也は霧恵の身体に触れ、しっかりと機械が作動していることを確認した。霧恵は知り合ったばかりの男性に身体を触られ羞恥心でいっぱいになったが、知也に下心が無さそうなのは分かっていたので、何とか我慢する。

「ていうか、どうして小学生の姿にさせたんですか。ロリコンですか？」

「お前なあ、高校生がランドセル背負ってたら明らかに変人じゃないか……」
適当に霧恵をあしらいつつ、知也は考える。

結局自分は、浅香彩香に襲いかかった少女を何となく助け、家を出てきてしまった。しかも、あの天才・浅香彩香の作った物騒な兵器を持ち出したまま。

俺はいったい、何をやっているんだろう。自分に殴り掛かって来た子供を、ただ何とな

く助けて逃げて来た。もしかしたら俺は、取り返しのつかないことを始めてしまったんじゃないだろうか。とても、今から家に帰るなんてことは出来ない。

俺は一体これから、どこに行けばいいんだ……？

知也は霧恵の顔をよく観察する。顔立ちは偽装されているが、その目の奥にあるものは全く変わらない。それは温度をもたない、氷のような熱にも似ている。

「行きましようよ」

霧恵は首をかしげながら言った。

そうは言うが霧恵。俺は一体どこに行けばいいんだよ。

帰る家も行くべき道も無い知也は途方に暮れる。

それでも、ランドセルの内部に埋め込まれた迷彩装置が、二十分の動作ごとに五分の充電・冷却時間を取らなければいけないことを知っていた知也は、駅に隣接したショッピングセンターで大きな旅行用鞆を買い、人通りの少ない裏路地で霧恵の変身を解かせるとランドセルを鞆に詰めた。

霧恵はあからさまに不機嫌そうな顔で乱れた制服を直し、リボンタイをしつかりと付け直した。霧恵の機嫌が悪いのは、この鞆を買う時に霧恵の小遣いを使ったからだろ。知也は財布を持っていなかったので、ここまで来る時の電車賃も霧恵に支払わせていた。

……とはいえ、俺は霧恵の被害者で、しかも彼女のことを助けた恩人なんだから、これ

くらいのことで機嫌を悪くされるのはおかしいんじゃないか？

そんな考えも当然口に出す事は無く、結局知也はそれから霧恵のあとを付いていく事にする。

特に行く場所も無いので、行き先は霧恵に任せるほか無かった。財布も携帯電話も持っていない上に、家に帰る事が出来ない知也は、情けないとは思いますが霧恵に頼るくらいしか出来る事が無いのだ。

霧恵も一応その事は分かっているのだろう、不本意ながら、電車を乗り継ぎ島の西へと向かう。自分の財布の中身で、大人のために切符を買ってあげる経験はそうそう出来るものじゃない、と思った。

人間の手によって制御された美しい海辺と研究施設の立ち並ぶ島の東部とは違い、島の西部は島民や他の地域へ向けた様々な商品を生産する工場群と、そこに従事する市民とその家族が住まう、いわば労働者のための区画だった。都市の中央部に住まう富裕層の人間のひとつは、おそらく島の西側に足を踏み入れた事も無いだろう。知也もその富裕層の一人だった。知也は間違いなく、一般的に裕福と言われる家庭よりも数割増しに良い暮らしをしていたのだ。

昼も夜も無く動き続ける機械の音が響き渡る街はしかし、多くの住民が住んでいる事もあり、しっかりと整備が行き届いているし、駅も清潔な地下施設になっていた。駅前には

根に覆われた商店街で賑わい、仕事や学校を終えた人々がそこかしこを横切っていた。

霧恵はウエストポーチから、知也の見た事も無い無骨な機械を取り出した。サイバーパ
ンクを思わせる角張った形状のそれを操作すると、その硬質な形状に似合わず、タッチス
クリーンが目の前に小さく投射される。どうやら通信用の機械らしいが、ちよつとしたパー
ソナルコンピュータでさえ名刺入れに収まる大きさになった今の時代に、どうしてこの機
械がこれほど時代錯誤な形状をしているのか知也には想像もつかない。

霧恵はその機械を操作すると、画面の向こうに話しかける。

「……もしもし、お姉ちゃん？ ……うん、無事。怪我もしてない。でも、一人余計なの
を連れて帰っていいかな」

〈余計なの〉呼ばわりされてさすがに知也は苦笑した。

「なにニヤけるんですか。行きますよ」

霧恵は知也の袖を引つ張ると、早足に歩き出す。

はじめ知也は、自分の袖を引つ張っているのが霧恵の手だと思ったが、よく見るとそれ
は、霧恵の手に握られた機械から飛び出したワイヤーの先端なのだった。三つ又になった
触手のようなアームが知也の腕をしっかりと握っている。

「なんて機械だよ、そいつは……」

「六号くんです」

「は？」

「五号くんは私が中学生の時に雨に濡らして亡くされました。おかげで六号くんは完全
防水ですよ」

そう言つて霧恵は、六号と名付けられた物体に頬擦りする。霧恵がそんなふうはこの機
械を愛でていた所で、その先端から伸びたワイヤーが自分の腕を拘束している事実に代わ
りは無いのだが。

六号はおおよそ長辺十五センチの立方体をしていて、片手で握りやすいよう腹の部分か
くびれてグリップになっている。デザインはまるで兵器か何かのように見るからに頑丈そ
うで、ひとつの側面には確かに〈六号〉というロゴがあらつてあつた。機器の先端が開
き、その内部からワイヤーが伸びている。おそらく、この機械を使えば高い場所に移動す
ることも出来るだろう。

「……お前、それを使って家の窓から入つて来たんだな」

「そういうことです！」

霧恵は後ろを歩いてきた知也のほうを向くと、満足そうにその機械を突き出してみせ
た。その華奢な霧恵の手と六号の厳つい形態のコントラストはどこかフェティシズムを感
じさせるもののようにも見える。

「六号くんは凄いですよ。メールから不法侵入までお手の物です」

「最低な機械だな、それ」

「しかも今日の運勢とラッキーカラーまでわかりますよ。どうです」

「どうもしねえよ」

知也は心の底からどうでもいいと思ったが、霧恵は構わず機械を操作すると、空間上に投影された仮想のタッチパネルは（今日のラッキーカラー＝橙色）に輝く。

その画面の、ラッキーワードと記された項目に（家族）と表示されているのは知也にとって悪い冗談のようにしか見えなかった。この状況の、いったいどこがラッキーなものか……。

「こんな原始的な古い機能が付いててもなあ」

知也は、自分でも三十分あれば作れそうな、一日おきに色と言葉をランダムに表示させるだけの機能を見て深く溜め息をつく。

「そんなことは無いですよ。風水的にも精密なデータベースを基に作ってくれた、最高のシステムです、この占いが外れたことは今までに一度も無いんですから！」

霧恵は自身ありげに胸を張って答えた。

きつと、この馬鹿みたいな機械を作った人間とこれから会う事になるんだろうな、と思いつながら知也は霧恵のあとに付いていった。こんなふざけた機械を商品として売り出す企業など存在するわけがないだろうし、霧恵が自分で作ったもののようにも見えない。恐ら

く霧恵は、鳥で活動する何らかの組織——いわゆるレジスタンスの一員なのではないかと知也は想像した。これもアルミナ市の、何の根拠も無い都市伝説の一つだった。

きつと辻さんに話したら、喜んで聞いてくれるだろう。そう考えると、知也はこの状況を少しだけ前向きに捉える事が出来た。

とにかく、恐らく自分はこれから、彩花の事を亡き者にしようとする誰かと会う事になるのだ。そうなれば、自分がいったい何をされるかも分かったものではない。

霧恵は街の奥のほうへ歩いていった。だんだんと道路の整備が雑になっていき、街灯の数もまばらになってきた。それでも時おり、コンクリートの壁に広告の電子ポスターが据え付けられているあたりが科学技術の最先端・実験都市鳥アルミナの意地のようにも感じられる。

霧恵はいくつもの団地が等間隔に並ぶ道を歩き、そのうちの建物の一つに向かった。

その集合住宅は光を取り入れるため外壁の一面がすべて半透明のガラス張りになっていて、部屋ごとの境目の部分には、人工のものだろう植物が生い茂っている。ペランダは無いようだったが、よく観察してみると、このガラス壁の上半分が解放出来るようになってるのが分かった。

団地の一つ一つの区画は薄い板のような形をしているが、ロビーに入ると内部は想像以上に広い。省スペース化のために、頑丈で防音効果に優れた薄い建材を壁面に利用してい

るからだ。人間の手によって完全制御されるこの島では、地震の被害を全く気にする必要がないのだ。

エレベーターに乗り上の階へ上がると、二人は薄暗い廊下の奥へ進み、いちばん端の部屋の鍵を開け、中に入った。

「お姉ちゃん、ただいまあ」

そう言つて、霧恵は靴を投げ出し廊下の奥へ歩いていく。見たところ、玄関を上がったすぐ横にバスルームがあり、廊下の奥へいくとダイニングキッチン、さらにその奥に部屋が二つという構造をしているようだった。知也が思っていたほど窮屈な感じはしなかった。部屋は明るく清潔感のある白を基調にしていて、掃除も良く行き届いていてなかなか居心地が良さそうに見える。

霧恵は知也に全く遠慮せず奥のほうへ歩いていってしまったので、開いたままの鉄扉の前で立ち尽くしているほかなかった。一応、知也にも十代の女の子の家に入ることには抵抗があつたし、霧恵は玄関の靴箱の上に六号と名付けられた端末を放置してしまつていた。……しかも、そこから伸びるワイヤーがまだ知也の腕を掴んだまま。

「お、おーい、霧恵」

知也は、近隣の住民の迷惑にならない程度の声で、奥へ行つてしまつた霧恵を呼ぶ。返事は無かつた。部屋の奥からは、あちこちを歩き回りながら霧恵が「お姉ちゃん、どこ？」

と呼ぶ声が聞こえてくる。

とにかく、私の用事が済むまでお前はそのまま突っ立っている、ということらしかった。知也は手持ち無沙汰のまま、自分が歩いて来た長い廊下のほうを振り向く。

「……なんだ、キミは」

知也の目の前、それも、すぐ一メートルほど先の所に、女性が立っていた。

「ああ？」

突然現れた彼女を見て、思わず知也は声を上げる。たまたま横を振り向いてみたら、すぐ隣に見知らぬ人間がいたのだから、驚くのも仕方が無かつた。何の足音も、ほんの少しの気配も知也には感じ取れなかつた。

彼女はいかにも適当に選んだといった感じのシャツとスウェットパンツ姿で、もしやこれが噂に聞く団地妻というものだろうかと思つた。手にはコンビニエンスストアのビニール袋が握られている。

「ええと、何かご用ですか？」

そう問いかけると、彼女はあからさまに怪しむような目つきで知也を睨む。三白眼の下に不健康そうなクマが出来ていて、じつと睨まれているとなかなか迫力がある。

「何かご用、はこっちの台詞だよ。通してくれ」

そう言つて彼女は知也の顔を横切り、部屋の中へ入ろうとする。そこでやっと彼女は、

知也の腕から玄関のままでワイヤーが伸びているのに気がついた。

「……ああ、そういうことか」

言いながら彼女は、玄関に置いてある六号を操作して、知也を解放してやると、その背中を後ろから押して、部屋の中に入るよう促す。

「お姉ちゃん、出かけてたの？」

女が玄関でサンダルを脱いでいると、すぐに霧恵が駆けつけた。どうやらこの女性が霧恵の姉ということらしかったが、二人の顔立ちがあまりに似ていないので知也は少し意外そうにその顔を見比べた。少なくとも十年は歳が離れているのだろう。

「霧恵、客はもてなすためにあるんだぞ。玄関に置きっぱなしにしちゃ駄目じゃないか」
「はい」

返事をしながら霧恵は知也のほうを見た。全く反省している様子が見られない。「あなたので私に怒られちゃったじゃないですか」という感じの目だった。

知也は拘束されていた腕をさすりながら、女に促されて椅子に座った。知也はこの家の間取りをダイニングキッチンに部屋が二つだと思っていたが、実際にはひとつの部屋の間仕切りを開けてリビングダイニングを広くしているようだった。奥の扉の一つには〈霧恵〉と書いてあって、おそらくそこが霧恵の部屋なのだろう。その横にも扉があるが、こちらには何も書かれていない。

「なかなか良い家だろう？」

知也の向かいの椅子に腰を下ろすなり、女はそう言った。ポケットから煙草を掴んで火をつけると、部屋の一面に白い煙が広がっていく。

「家具はみんな霧恵の趣味でね。暇があれば掃除もしてくれるし、良い子に育ってくれたもんだ」

知也は部屋を見渡す。お世辞にも豪華とは言い難かったが、少ない予算で何とか部屋を奇麗に見せようとする努力は確かに感じられる。よく見ると、知也の座っている安っぽい椅子の座板も自分で張り替えたものらしかった。

「良い子、ねえ」

知也は自分の肩が疼くのを感じて、そこを撫でてみる。シャツのボタンを開けて確認すると、霧恵に殴打された部分は赤く腫れ上がっていた。

「……悪かったよ、巻き込んで」

そう言う女は、自分の部屋の中にいた霧恵を呼び出して、傷の手当をするように指示した。霧恵は文句も言わず救急箱を取り出すと、すぐに知也の服を脱がせ始める。

「浅香彩花を襲うように言ったのはあんただな」

「そういうことだ」

彼女は特に悪びれる様子も無く答えた。

知也は改めてこの女性のことを観察する。いかにも不健康そうな目つきは、しかしながら明確な目的を見据える、揺るぎない人間に特有の力強さを持つていた。栗色の髪は後ろで縛り、寝癖がついているが形はわりと奇麗に整えられていて、顔立ちによく似合っている。霧恵と比べて痩せた身体は、彼女の生活習慣の不安定さを物語っているようだった。

「自己紹介がまだだったな。私は芳川霧絵。……キミは？」

「浅香知也」

「知ってる」

霧絵、と名乗った女性はそうして、知也の顔をじっと見つめた。煙草の煙が晴れると、彼女の瞳がはつきりと見える。二人はそのまま少しのあいだ睨み合っていた。

「……お姉ちゃん。どうするの、この人」

霧恵がいつの間にか知也の身体に包帯を巻き終わると、横の椅子に座って不安そうに霧絵に問いかける。

霧恵は、霧絵の計画に知也を巻き込んでしまった責任を感じていた。態度には出さなかったものの、浅香彩花の元から逃げ切り、ここまで帰って来ることが出来たのは間違いない。知也の協力のおかげだった。

しかし、不安そうな霧恵とは裏腹に、霧絵は知也の事をそれほど深刻には考えていないようで、

「どうもしないさ。知也くん、とりあえず今日はウチに泊まっていけ」

とだけ言うと、立ち上がって伸びをしながら奥の部屋——おそらくそこが彼女の私室なのだろう——に入っていくてしまう。

「霧恵。今日の夕ご飯は三人分で頼むよ」

「ちよ、ちよとお姉ちゃん、本気!? 知らない男の人を泊めるなんて!」

「私はよく知ってるから、大丈夫」

そうして霧絵の部屋の扉が閉まってしまうと、静まり返ったダイニングで知也と霧恵は顔を見合わせた。

「……………変な事したら、殴りますからね」

そう言っって霧恵は、そっぽを向いてキッチンへ歩いていく。

面倒な事になった、と思っって知也はまたひとつ溜め息を吐いた。

三人がテーブルについて夕食をとり始めたとき、安っぽい壁掛けの時計は十時半を差していた。本当なら、自分とはとくに彩花の作った不味い料理を食べ終えていたのだろうと思っって、知也は自分の家の広いリビングやダイニングのことを思い返した。

あのまま霧恵が襲っってこなかったら、俺はきっと彩花と一緒にテーブルを囲み、食事をしっ、それから彼女に何かを言われて……その後きつと俺はまた不機嫌になっていただろ

う、と思う。

そう考えると、知也は不思議な気分になった。——様々な偶然が重なって、俺は今こんなところに居て、変な姉妹と夕食を囲んでいる。

どうして俺はあの時、霧恵のことを庇ったのだろう。霧恵は間違いなく俺の生活を脅かす存在だったし、俺の身体を傷つけたあの一撃には一切の容赦が無かった。それなのに、俺は自分の色々な立場も捨ててこの女のことを助けてしまった。……いつたい、何のため

に？

それは結局、知也には理解出来ない偶然のせいだったかもしれない。しかし、偶然よりも確かな意味を持つ必然というものが、果たしてこの世に存在するだろうか。

霧恵の作った料理は、使っている食材の割にはなかなか上出来で、いかにも手慣れた家庭料理、という感じがした。知也はほとんど毎日の食事を自炊していたし、料理の腕前にはそれなりの自信もあったが、（もちろん、知也が努力して技量を習得したのは彩花への反発のためだったが……）霧恵には素直に負けを認めるしかないと思った。

知也はいくつもの料理で埋め尽くされるテーブルに目を向ける。そこには当然のことだが三人分の食器があつて、三人分の手が動き、三人で食事をしているのだった。それが知也には、なかなか不思議な事のように感じられたのだ。知也はいわゆる、一般的な家庭の食事風景を生まれて始めて目の当たりにしていたのだった。

「知也さん、醤油とって、醤油」

「ん？ ……ほら」

「どうも」

知也が醤油の容器を取って渡すと、霧恵は礼も言わず、魚の揚げ物が乗った自分の皿を差し出す。

「……なんだよ」

「掛けて、ってことですよ」

「ああ、はいはい」

霧恵は相変わらず、どこか不機嫌そうな声で知也に話しかけてくる。知也が一緒に食卓についているのが当然、といったような態度にはなかなか戸惑いながら、言われた通り醤油を掛けてやると、霧恵は満足したようにそれを頬張る。

「アジフライに醤油っていうのは……」

「ウチではそういうことになってるんです。お姉ちゃんもそうだし」

「理解出来んな」

知也はそう言って、塩をふった自分のアジフライに舌鼓を打つ。

三人はそれから大して意味のある会話もしないまま、ただ食事を済ませた。彩花のこと、知也の事も、これからの事も何も話さなかった。

全面ガラス張りになったダイニングの壁に近づいて、知也はその窓を開けた。壁のポタシを押すと、ガラス面の上半分が持ち上がり、夏の夜空の涼しい空気が流れ込んでくる。その向こうには光り輝く太平洋ではなく、隣の棟の窓一つ無い壁面が、障壁のように黒く佇んでいるだけだった。

「いい景色でしょ？」

傍らには、食器を洗い終えた霧恵がいつのまにか立っている。

知也は、霧恵の目線の向こうを見た。もしかしたら、霧恵が自分とは違う方向を見ているのかもしれないと思ったのだ。しかし霧恵は、知也と同じところを見つめていた。霧恵は、黒い壁に覆われた景色を見て「いい景色」と言ったのだった。

知也はもう一度、星も海も見えない真っ暗な風景を眺めると、

「いい景色だな」

と答えた。

辺りからは、昼も夜も無く動き続ける工場の音が聞こえてくる。何をしているのか、時おり鐘を打つような音が夜空に吸い込まれていくのを知也は感じた。

次の日、知也は霧恵に乱暴に揺すられて目を覚ました。自分の二十年の人生の中で一番酷い起こされ方だと、曇ったままの頭で考える。

「何をやってるんですか、あなたはあ！」

霧恵はそう言うて無理やり知也を立ち上がらせるが、当の知也には霧恵が何を怒っているのか全く分からなかった。

「お、おい。起きたばっかりなのに揺らさないでくれよ、頼むから……」

昨晚、三人で夕食をとった後で突然に強い眠気を感じた知也は、蒔絵に頼んでそのまま寝かせてもらう事にした。この家には空いている部屋などなかったもので、知也は蒔絵の部屋で眠る事になったのだが……

「なんでお姉ちゃんと一緒に寝てるんですか！ しかも抱き合って！」

そう言うて霧恵は知也の両肩を掴んで思い切り揺らす。ろくに力の入らない知也は首をガクガクと前後に揺らし、危うく意識が飛びかけた。

「落ち着けて……よく分からないけど、たぶんこの人が勝手に抱きついて来たただけだから……」

ようやく解放された知也は、今の今まで自分が眠っていた布団を見下ろす。確かにその小さな布団の上には芳川蒔絵が転がっていた。これだけ霧恵が騒ぎ立てていても全く目を覚まさない。知也には寝ている間の記憶など全く無かったのだが、恐らくは霧恵の言うよ

うに、彼女に思い切り抱きつかれていたのだろう。

霧恵は歯を食いしばって知也のことを睨みつけていたが、電子レンジの停止を知らせる音が鳴ったのを聞くと部屋の外に出て行く。

「お姉ちゃんを起こして来て下さい！　もう朝ごはん出来ませうから！」

そう言うって速ぎかかっていく背中を見て、まだ寝ぼけたまま知也は呆然と立ち尽くしていた。

それから、気持ち良さそうに寝息を立てている蒔絵の姿を見て、これはなかなか面倒事を押し付けられたなと思った。

知也の嫌な予想通り、蒔絵は知也がどれだけ揺さぶっても目を覚ますことが無い。最初は遠慮がちに肩に触れていた知也も、次第に面倒くさくなって彼女の脇の下に両腕を差し入れ、柔らかい布団の上に投げ飛ばしたりと散々な目にあわせてやったが、それでも蒔絵が目を覚まさないことを確認すると、眠ったままの彼女を抱きかかえてダイニングの椅子に座らせた。

それから知也はテーブルの上に用意された蒔絵のぶんの味噌汁を頭からかけてやるうとしたが、さすがに霧恵の冷たい視線を感じたので黙って席に着いた。

「……知也くん。キミさ、あれはいくらなんでも人間に対する扱いではないと思うぞ」

朝食の匂いでもよく目を覚ました蒔絵は、死にかけのような目つきをしたまま知也に

言った。

「起きてたのか、あんた」

「……あれだけ勢い良く投げ飛ばされれば、寝ててもわかる」

対する知也はというと、今の運動のおかげでずいぶんとすっきり目が冴えていた。わずかに汗をかいているあたり、蒔絵に対して相当酷い扱い方をしていたような気がするが、なにしろ知也も寝ぼけながらやっていったことなので、あまり記憶がはっきりしていない。

「あんなに激しくされたら、さすがの私も泣き出すぞ」

「なかなか起きないあんたが悪いんだろ……」

知也は朝食の献立が出そろったのを確認すると、さっそく箸を手にとり鯛の照り焼きを口にした。正直なところ、起き抜けに激しい運動をしたせいでもかなり腹が減っていたのだ。

昨日に続き霧恵の料理の腕前に感服していると、制服をしっかりと着た霧恵が学生靴を持って玄関のほうに歩いていくのが見えて、声をかける。

「お前は食べないのか？」

「もう食べちゃいましたよ。学生の朝は早いですから」

それから、「行ってきます」と言うのと霧恵は、そのまま玄関を開けて外へと出て行ってしまった。

知也はテーブルのほうに視線を戻すと、まだ寝ぼけたまま怠そうに箸を動かす蒔絵のほ

うを見る。いつまた眠ってしまったのか心配になるような手つきだった。女性の歳を詮索するのはさすがに気が引けたが、油断すると自分より歳下の子供を相手にしているような気分させられた。

——それは一瞬だけ、彩花と同じ印象を知也にもたらす。

知也はその考えをすぐに拭い去り、静かに箸を進めることにした。

「知也クン。今日は用事とかあるのか？」

蒔絵は箸が上手く握れないのか、震える左手をなんとか操りつつ尋ねて来た。

「何も無い。これからもずっと」

大学の授業自体は今日も平常通り行われる。単に、知也が出席の必要ナシと判断したただけであった。しかし、もちろん知也はそんなものに律儀に出席するほど真面目な学生ではない。たまに気が向いて授業に出る事はあっても、すぐに飽きて眠っているのが普通だった。出席数は明らかに足りていないはずなのだが、お人好しな同期・兩宮良太がほとんどの授業で知也の分の出席票を（勝手に）出しているので問題は無かった。

「私、これからちょっと仕事に行かなきゃならんから。二時間で戻る。好きに過ごしてくれ」

いつの間にか空になった食器を重ねて食洗機に投げ込むと、蒔絵は大きな欠伸をしながら自分の部屋に戻っていく。

「……ああ、そうだ。ごちそうさま、知也クン」

「これ、霧恵が作った料理だけど」

「そうじゃなくて」

蒔絵は目を力強く擦ると、知也のほうに軽く向き直って言った。

「キミの匂い、けっこう気に入った。また頼む」

「……はあ」

知也は呆れたまま、自分の食器を片付け始める。

蒔絵はそれから面倒くさそうに顔を洗い自分の部屋に戻っていった。

知也はとりあえず、自分もシャワーを浴びることにする。洗面所に行き、適当なバスタオルを掴み取ると服を全部脱いでしまう。

……そういえば、着替えなんて持っていないぞ、などと知也が思っていると、洗濯機の上の棚に新品の衣類が置いてあるのに気が付いた。

知也はバスルームに入ると、勢い良く降り注ぐシャワーの湯を頭からかぶり、とにかく体中の汚れを流していく。シャンプーもリンスも、女性用の甘ったるい匂いのするものしか置いていなかったが、気にする事は無かったし遠慮もしなかった。

椅子に座り目を瞑ると、しばらくそのまま熱い湯を浴び続ける。

身体がだんだんと暖まっていくのが感じられる。——いや、それはおかしい。今は七月

で、身体は最初からのほせるほど熱い。それでも、今このときに知也が味わっていた熱の感覚はもっと別の所から現れてくるようだった。その時になって知也は、今の自分が不思議なことに安心を感じているのに気がついた。そしてその原因を振り返ると、やはり頭の中には夕日に照らされた霧恵の姿が浮かんでくるのだった。

俺は本当に霧恵のことを助けたんだろうか。……俺が霧恵に助けられたかったのではないかと？

……………。

「おい、知也クン」

バスルームの扉が勢い良く開かれる。驚いた知也がすぐに振り返ると、そこに見知らぬ女性が立っているのが見えて、慌てて扉を閉め直そうとするが、彼女の手が知也の手首を掴んだ。

「キミはあれだな、意外と長風呂なんだな。女の子か？」

その口調のおかげで、ようやく目の前の女性が芳川蒔絵であることを理解して、知也はもう一度驚いた。しっかりとパンツスーツを着込み髪を整えた姿は、今までのだらしない格好の蒔絵とは全く別の人間にしか見えなかったのだ。

「……誰かと思った。どうしてそんな格好してるんだよ」

「だから、仕事って言ってるだろ。マトモな格好しないと文句言われるんだよ」

そう言って、蒔絵は窮屈そうに身じろぎする。今すぐにでも身を締めつける布地を脱ぎ捨てたい、といった感じだった。

「家開けるから、外には出ないようにしてくれ。それだけ。じゃあね」

それから面倒くさそうに扉を閉めると、蒔絵は歩いて行った。

知也もバスルームから出て、新品の服を着ると、さっきまで着ていたシャツと下着を洗濯機に投げ入れ、置いてあったドライヤーで髪を乾かす。

その日も雲一つ無い晴天で、リビングダイニングの窓からいつぱいの日差しが差し込んで来ていた。ナチュラル系のフローリング床が陽光を浴びて輝き、霧恵の趣味だろう緋色のテーブルランナーが敷かれたパイン材のダイニングテーブルが奇麗に真っすぐな影を伸ばして白い壁を飾る。その光景はどこか、明るい森のコテージを思わせる温かみがあった。

知也はガラス張りの壁面に椅子を持つてくると、窓をいつぱいに開け放つ。夏の心地よい風がいつぱいに吹き込んで来て、これはなかなか気持ちが良いと思った。何か本でも読みたい気分だったが、わざわざ二人の部屋を漁ってまでそうしたいとも思わなかったのだ、何も考えずにただのんびりと時間が経つに任せた。

宣言通り、蒔絵は午前の十一時頃——ちようど、彼女が家を出てから二時間後に部屋に帰って来た。彼女が家の扉を開けて玄関に上がった時には、もうスーツの上着を脱ぎ、その下のブラウスも脱ぎかけという、一言で言つてとんでもない格好になっていた。

「こんな暑い日にスーツ着て来いとか……バカか？」

「馬鹿はあんただろ。なんだよその格好、それで帰り道歩いて来たのか？」

知也の言葉には返事もしないまま、床に服を脱ぎ散らかしながら蒔絵は自分の部屋に入っていく。次に部屋の扉が開いた時、蒔絵はまた大きめのＴシャツ一枚だけという格好になっていた。髪も面倒くさそうに後ろでまとめている。

「……なあ、あんたの仕事っていったい何をやってるんだ？ 真つ昼間に帰って来てそんな格好するような社会人は見た事無いぞ」

蒔絵は冷蔵庫を開けて、知也の見た事も無い銘柄のオレンジジュースを取り出して一気に呷った。唇の端からこぼれた液体が流れ出して白いＴシャツに染み込むが、本人は全く気にしないらしい。この女は、柑橘類の汚れは手間のかかる染み抜きをしなければいけないことも知らないのだと知也は思った。きつといつも、霧恵がああいうＴシャツを真つ白に戻しているのだろう。ちなみに、この場合の染み抜きには台所用の中性洗剤と歯ブラシを使うのが主婦の定番である。

「仕事なんて適当にやればいい。しつかりと依頼をこなせるなら、家に居たって構わない」

蒔絵の職業は、工場で利用する精密機械のプログラミングを行う技術者らしかったが、仕事は尋常でないほど速く精確なので職場にいる時間はほとんど必要無く、朝の散歩がてら一度顔を出し、連絡を聞くとその後は家に帰って作業をするらしい。

それがどれほどの好待遇なのかは知也にも想像がつく。これだけ好き勝手な行動が許されているのだから、蒔絵の仕事ぶりはそれに見合うだけのものなのだろう。

「まあ、仕事が楽なおかげで私は自分のやるべきことに専念できるというわけだ」

そう、彼女には仕事よりもよほど重要なものがあるはずだった。そのために彼女は霧恵を使い、浅香彩花を襲った。

「ようやく、ゆつくりと話が出来るな、知也クン」

「やつとだな。待ちくたびれたよ」

「私もだ。ずっとずっと、キミと話せる日を待ってた」

そう言つて蒔絵は、もう一度しつかりと知也の姿を見た。テーブルに肘を乗せて頬杖を付くと、知也を向かいに座らせる。蒔絵の軽い髪はそよ風に揺れて彼女の柔らかそうな頬を撫でていた。

「知也クン、キミならよく知っているはずだ。——今では、絵に描いた餅が食べられるのだということ」

蒔絵はゆつくりと話を切り出した。

知也は思い出す。家のリビングに飾られていた、立体ホログラムのハナミズキ。それは確かに、花卉を千切って食べればそれだけで食欲を満たすことが出来るし、味も設定を変えただけで自由自在に変化させられる。

「しかし、現在の技術力では、味覚に対しての幻覚作用は実用段階にない——世間ではそういうことになっているのも、キミは知っているな」

「もちろん」

蒔絵が知也のほうをじっと見つめる。

「偽装化学の技術力は今、世間に知られているよりもずっと先まで進んでいる……にも関わらず、このテクノロジーの多くは島民に隠されているんだ。何故か分かるか？」

「陰謀論だ、それは。何の根拠も無い噂話じゃないか」

「しかしこれは事実だ。今や島の食品産業は全てこの技術を利用し、味や食感を偽装している。誰かの利益のためだけに、多くの人間を騙しているんだ」

その噂話のことを知也は、飽きるほどよく知っていた。知也にその話を何度となく聞かせていたのは彼の想い人・辻あや子だったのだから。

「……それくらいのこと、加工食品や遺伝子組み換え作物と何の変わりもない。昔から、コンビニやスーパーで売られてる食品の中には人間を殺せるだけの保存料が当然のように練り込まれてただろ」

知也の反論に、蒔絵は頷いた。

「なるほど、確かにこれだけではただの都市伝説でしか無い。……では、これはどうかな」

そう言うと蒔絵は立ち上がり、部屋に置いていた鞆を持つてくると、その奥からお菓子の赤い袋を取り出した。

「なんだ、これは」

「〈都市クッキー〉、と呼ばれているものだ。労働者層の中で長らく愛され続けている、ロングセラーのお菓子だ。値段も安く、食べやすい。栄養価も申し分ないな、肉体労働の従事者には雇用者が配給していたりもするくらいだ。幼稚園の食育や小学校の給食のデザートにも出されるほど、島の西側の住民には馴染みがあるものだ。……まあ、育ちの良いキミは見たことが無いかもしれないが」

「……いや、あるよ、見たことはある」

知也はその袋を掴み、よく観察した。シンプルだが独自性のあるパッケージデザインが、往年のロングセラー商品らしいキャラクターを作り出している。もちろん、原材料や成分表示には何の問題も無い。

蒔絵は知也の手からその袋を受け取ると、開封して中の四角いクッキーを取り出した。明らかにクッキー以外の何物でもない、小麦色のその板のような形状の表面には、アール・ヌーヴォー調の模様が入っている。

それを蒔絵は、用意した皿の上で砕いてみせる。わずかに粉が飛び、四角いそれはいくつもの破片に変わる。

「この食品は本物のクッキーではない。……これはな、アルミナの茎を固めた錠剤だ」

知也は、自分の家の周りに咲いていたあの花を思い浮かべる。アルミナはもともと、CO2汚染と食糧難を解決する事を目標に生み出された人工花で、味は酷いがその茎を食べることが出来るという話は聞いた事があった。確かに、恐ろしい速度で勝手に繁殖するアルミナを原料にすればその原価は限りなくゼロに近く出来るはずだ。そして、錯覚素子を用いて味や見た目を加工すればいくらでもクッキーを量産することができる。

「……冗談だろ？」

「いや、間違いなく事実だ。食感・味・匂い・手触り——すべて偽装されている。もちろん、人間がそれを見破ることなど不可能だ。どれだけ細かく砕いたところで、こいつはクッキー以外の何にも見えないだろう。」

そのうえこの食品には情報を偽造するナノマシンが組み込まれているから、機械による探知も効果がない。……このナノマシンのことは知っているか？」

「いや、全く」

「そうだろうな。それは彩花の興味を惹く事が無かったから」

蒔絵はそのとき確かに「彩花」と名前を口にしたが、知也は気にしない事にした。彼女

はクツキをテーブルの上に置いて腕を組んだ。

「ひとつ確認しておくが、いかに人間の五感を惑わす錯覚素子と云えど、専用の探知機を通せばある程度までは本当の姿を見る事が出来る。」

それから、例えば……ナイフの刃先を偽装した木の枝で人間を斬りつければ、彼はきつと痛みを感じるようになる。思い込みの強い人間であれば血を流す事もあるかもしれない。だが、それで果物を切ることは出来ない。果物は人間ではないのだから。偽装化学が人間の感覚器官に影響を与えるものである以上、機械を惑わすことなど出来ない。

つまり一応、機械を使えば偽装化学の嘘を見抜く事は出来るのだ。……ただ、このクツキだけは違う。

このクツキには情報を偽造するナノマシンが含まれている、と言っただろう。これは錯覚素子とは逆の働きをする粉なんだ。つまり、人間には何の影響も及ぼさないが、あらゆる機械はこのナノマシンによって幻覚を見せられる。そういう性質を持つナノマシン——これは便宜上〈Phaser〉と名付けられている。

錯覚素子とPhaser。この二つを組み合わせた時、このクツキが偽物であるという事は永遠に隠蔽される。人間にも機械にも、このクツキの本当の姿を見破る事は出来ない。都市クツキーというのは、人間と惑わす錯覚素子と機械を惑わすPhaser——二つの技術が史上初めて併用された実例だ。……だから私はこのクツキーが心底嫌いなんだ」

蒔絵は、鞆の中からコンピニのビニール袋を取り出すと、その中にクッキーと袋を詰め込んで、口の部分をきつく縛る。それから、クッキーの粉の付いた皿をキッチンに持っていき、使い捨てのスポンジに洗剤をたっぷり付けて洗った。

知也は、そんな蒔絵の病的とも言えるほど入念な皿洗いを眺めながら問いかける。「……それなら、どうしてあなたは知っている？ 人間にも機械にも見抜けないその事実を、どうしてあなたは知っているんだ」

その知也の指摘は至極当然のものだったが、そのことを聞かれると蒔絵は露骨に目を逸らした。それは蒔絵にとっては誰にも言いたくない、過去の失敗だったからだ。しかし、それでも彼女は言わなければいけなかった。

蒔絵は、先ほどとは違う、わずかに揺れる瞳で知也を見つめると、呟くような声で告白した。

「簡単な話だ。都市クッキーを作ったのは——Phaserを作ったのは私なのだから。

この話を知っているのは、実際にクッキーを作っている企業の御偉方を除けば、私とキミだけだよ、知也くん」

知也はその時、蒔絵の瞳の奥にあるものを見ようと身を乗り出したが、彼女はすぐに目を逸らしてしまふ。

あらゆる機械を惑わすナノマシン・Phaser。そんな話をそうやすやすと信じられるとは思わなかったが、それは全く有り得ない話というわけでもなかった。何より、知也自身この島ではほぼ間違いなく、偽装化学を用いた詐欺が行われていると確信していた。というより、それは島の全ての間人にとつての暗黙の了解だった。

これほど高度に発達した都市では、恐らくその技術の何もかもが倫理的に正しい使われ方をされているわけではない。しかしながらそれは、人間の感覚器官を騙し続ける偽装化学に浸かり切ったアルミナ市の人間が心の中で思っただけでも、決して口に出す事はない。騙されていることにさえ気がつかなければ、自分たちはずっと暮らしていられるのだから。

偽装の街に暮らす人間たちが手に入れたのは、自分自身の感じた疑問を自分で見なかったことにする、そういう考え方そのものだった。だからこの島の人間たちはみな、自身自身の感性を信じるということが出来ない。それが偽物であると知っていないながら、その事実が見えないふりをして生きているのだった。

蒔絵は皿を片付けてしまうと、知也の傍らに立つ。

「とにかく、これほど市民に愛されているこの食品を私は、霧恵に一度として食べさせたことが無い。外で貰うことがあっても、口にしないよう言っただけで聞かせてきた。……わざわざそんなことまでして、私が霧恵をクッキーから遠ざけてきた理由は分かるか？」

「……身体への影響か」

「そういうことだ。子供から大人まで、まるで中毒みたいに皆がこれを口にしているんだ。……いや、おそらく依存症を引き起こすような効果もあるのだろう。そして、身体への作用にもまして、これは精神への影響がなかなか厄介な代物なんだ。

なあ、知也くん。これを食べていると、もともと見えていたものが見えなくなる……と言ったら、信じるか？」

蒔絵は知也の顎を持って自分のほうへ向けた。また風が吹いて、お互いに、相手の髪から同じシャンプーの香りがするのを感じる。

「信じられないことはない。あり得ない話じゃないから」

知也は、すぐ近くに見える蒔絵の瞳に、翠色の光を見た。それは瞳孔に沿って輪を縁取るような、金色がかったオーロラのような輝きだった。

その輝きは太陽の光を受けて煌めき、静かな湖面のようにも見える。

「もともと見えていたはずのものが見えなくなる。そうして自分達の生活に疑問を持ってなくするのがこの偽装化学の怖いところだ。人間の自由な想像力を脅かし、ただの動物に変えてしまう神経毒。こんなものがクツキーに混ぜ込まれているなんて、誰が想像出来る。

……ところで、この作用はクツキーだけでなく、鳥の様々な食品にも付加されている、なんて言ったら？」

「それはさすがに疑いすぎだと思っけどな。それで、あなたはそれを辞めさせるためにこ

んな工作なんかやっているわけか？」

そう言っただけは、まだ痛みの残る自分の左肩を持ち上げて見せる。

蒔絵はごまかすように小さく笑った。

「まあ、キミには巻き込んでしまっただけで申し訳ないと思っけいるよ。キミが霧恵を助けてくれていなければ、私たちはもうおしまいだっただけからな」

そう言っただけは知也に後ろから抱きつく。礼のつもりか、自分の身体を知也の背中に密着させた。

知也はそれを無視したまま（他にどうしろと言っけんだ？）、なおも蒔絵を問いつめる。

「……あの時霧恵に、三階へ上がるよう指示していたな？」

蒔絵は何も答えなかつた。

あの時、というのはもちろん、知也と彩花のことを霧恵が襲った、昨日の夕方のことだ。知也の家に窓を割って侵入し知也を鈍器で殴ったあと、霧恵は廊下を走り、それから階段を上り三階へ駆け上がった。——気が動転していたとはいえ、普通は一階へ下るはずではないのか？

「最初からあなたは、俺が霧恵を助けると思っけ昨日の計画を立てていたんだろ。……何故だ」

それを聞くと、蒔絵は知也に抱きついたまま笑った。蒔絵の吐息が知也の耳に触れる。

「キミはなかなか賢い奴だな」

蒔絵は楽しそうに知也の首に両腕を絡ませ、上下に揺れてみせる。その反応がかえって知也には不気味に感じられた。

蒔絵は、俺が霧恵のことを助けると確信していた？ いったいどうして？

知也がああの時霧恵を助けたのは、間違いなくその場の気まぐれでしかないはずだった。そんな行動をとった理由など、知也には全く思い付かない。

「キミなら、霧恵のことをきっと助けてくれる。そう思ったのさ」

蒔絵のその声には少しの曇りも無く、それは間違いなく自分の考えを確信しているという響きをもって知也に届く。

「予想通り、キミは霧恵の事を助けてくれた。そして今、こちらの手にはあの兵器がある」蒔絵はようやく知也から離れると、陽がいつぱいに差し込む窓の前で、片足で立ってくると一回転した。逆光を浴びて真っ黒な影になった蒔絵が、果たして右回りに回ったのか、それとも左回りだったのか知也には分からない。

「あのランドセル、触らせてもらったよ。あれは間違いなく、私たちの心強い戦力になる。……でも、起動も分解も私には出来なかった。生体認証が要るんだ。もちろん、キミならあれを動かせるんだろう？」

「協力しろっていいのか？ 俺は人間の自由にも尊厳にも興味なんか無い」

「そう」

蒔絵は知也の答えを聞いても表情を崩さない。僅かに微笑むその姿が何を表しているのか、彼女が何を思っただけの事を見つめているのか、それが分からないまま近づいてくる蒔絵はひたすらに不気味だった。

蒔絵は知也の前に立つと、聞き間違えないようにゆっくりと、あまりにもおかしい提案をした。

「いいかい、浅香知也クン、これは脅しだぞ。……もしキミが協力してくれないと言うなら、私は霧恵を殺すことにする」

蒔絵が一言一句、聞き逃さないようにわざとゆっくりそう言ったにも関わらず、知也は彼女がなにか選ぶ言葉を間違えたのだと思った。あるいは自分が聞き間違えをしているのかと思った。

「なぜ霧恵なんだ？ 俺と霧恵は知り合いでも何でも無い。霧恵を人質に取ったところで、なんてことはない。俺が昨日あいつを助けたのだから、間違いなく偶然だ」

知也には、なぜ蒔絵がこんなことを言うのか全く理解が出来なかった。——どうしてこの女は、そこまでして俺と霧恵を結びつけようとするんだ？

知也の言葉を聞いても、蒔絵はやはり笑みを崩さず、むしろ知也の全てを見透かしたかのように、彼の唇に指を触れて念を押した。

「いいや、違うね。キミは絶対に霧恵を見殺しになんか出来ない。きっと、霧恵のためなら何でもしてやるだろう。賭けてもいいぞ」

「……あんた、占いでもやってるのか？」

「まさか」

それだけ言うと、もう話は終わり、とでも言うように蒔絵は背中を向けた。鞆の中から煙草を掴んで咥えると、自分の部屋へと戻っていく。

「まあ、すぐに協力してくれなくても構わないさ。どちらにせよ、この家にはいつまでも居てくれて構わない。……ああ、それから。昨日助けてもらったお礼だ。知也くん、霧恵とデートして来ていいぞ」

「好みじゃないよ、あいつは」

「遠慮するな。霧恵にはもう伝えてあるから。十六時に西側中央駅の改札前だ」

閉じられた扉を眺めて、知也はまた一つ溜め息をついた。

霧恵もまた、教室の外の青空を眺めながら静かに溜め息をついていた。

アルミナ市の西の端に位置する市立第二高校は、窓のすぐ外に太平洋が広がる、ある意味ではロマンチックとも言えるかもしれないロケーションの中にある。

霧恵も初めてその教室に足を踏み入れた時には、見慣れたはずの海がやけに奇麗に見えたものだった。朝早く、教室の扉を開けると、誰も居ない暗い教室の窓の外は青い空と海で埋め尽くされている。

ところが実際に一ヶ月も授業を受けるとこの校舎は、潮風で髪は気持ち悪いし、梅雨になれば薄暗く濁った空と海を見るたび憂鬱になる、なかなか煩わしい建物であることを理解した。

それでも、夏の太平洋はなかなか爽快だった。やはり潮風のせいで窓は開けられなかったが、屋内はよく冷房が効いていたし、空も海も透き通った青色がどこまでも遠くへ伸びていった。シアンの中、ターコイズブルーの海。教室が静まり返ると、波の音やカモメの鳴き声が鼓膜の奥に染み込んでくる。

……そんな清々しい景色も、今の霧恵の気分を変えてはくれなかった。

(何とかしなきゃいけない)

霧恵の頭の中で、その言葉だけがぐるぐると渦巻いていた。

爽やかな青緑の水面ではなく、重く暗い深海の色のように、渦巻いて霧恵を引き込んでいく。

「キリ、授業、終わったけど」

「そっか」

顔を上げると、上野マコトの姿がそこにある。マコトは空いていた霧恵の前の席に座ると、その素行に似合わない可愛らしい弁当箱を開いた。

霧恵は朝から何も食べていなかった。朝食は先に食べたと嘘をついて、いつもより早く家を出て来てしまったのだ。もちろん弁当も作って来ていないし、昨日の予想外な出費のせいで財布の中身も軽かった。

(それもこれも、全部あの人が悪いんだ)

心の中でそう呟くと、頭の中にまた浅香知也の姿が思い浮かんできて、霧恵は何とか気を紛らわせようと目を瞑り、頬杖をつく。

朝からずっとこんな調子だった。昨日の夜からどこか浮ついた気分で、鞆の中に教科書も筆箱も入っていない事にさえ気がつかなかった。

放課後の事を考えると霧恵は、何も考えられなくなって途方に暮れる。

——霧恵。明日の放課後、知也クンとデートしてきなよ。

昨日。三人での夕食を終え、知也がすぐに眠りについてしまうと、食器を拭いていた霧恵に向かって蒔絵はそう言ったのだった。

確かに、あの人には感謝しているけど。

……でも、デートって、そういうもののかなあ？

とにかく霧恵は、どうすることも出来ないまま一日の授業が終わるのを待った。

島のいちばん西に位置する高校を出ると、霧恵は他の生徒たちの波に飲まれるようにして駅まで歩いた。アルミナ市の東西を横断する路線は、その区間ごとに三つに分かれている。朝夜の通勤時間だけは直通運転が行われるが、それ以外では同じ線路を通るのにも乗り換えが必要になる。

西側中央駅は、高校の最寄り駅から出るいぶき西部線——ビッドな赤紫のラインが目印の電車——の終点駅で、その周辺は島の西側に住む若者で賑わう街だった。中高生が多くやってくるだけあって、駅の周りには大抵の遊び場が揃っている。ふらふらと歩いているだけでも暇をしない街だった。

霧恵が十五分ほど電車に乗ってその駅に着いた時には、約束の時間までまだ少しだけ余裕があった。

霧恵はスクールバッグの中から六号を取り出そうとして——そこでまた、今日の鞆の中には何も入っていないのだという事を思い出した。

携帯電話を持っていない霧恵にとって、主立った連絡手段は六号しかない。

霧恵がその不思議な機械を初めて与えられたのは、六年ほど前のことだった。初めて蒔絵から貰ったその端末は、今の六号よりもずっと小さな、ペンダントの形をしていて、モ

ニターもなく、単なる蒔絵との連絡手段でしか無かった。名前もつけていなかったと思う。それから、霧恵が大きくなるにつれて蒔絵はだんだんとその機能を拡張していった。そんな中、最新の六号はそれまでとは全く異なる形状を持っている。大きさは今までの三倍以上になっているが、これは移動用のワイヤーを組み込んだためであった。他にも、六号は今までと比べ物にならないほど物騒な機能が追加され、霧恵が握りやすいように、まるで機関銃の持ち手のような形状をしていた。と言うよりそれは、先端からワイヤーが発射される、通信機能の付いた銃器でしかなかったのだ。

無骨で堅牢なものになったそれは明らかに少女の持つようなデザインではなかったが、霧恵は六号のこのフォルムをいたく気に入り、常に肌身離さず持ち歩いた。

もつとも、霧恵がその六号を使ってやることと言えば、ネットサーフィンでもなく長電話やメールでもなく、一日に一度の占いアプリだけだったのだが。

そういえば、今日は朝の占いも忘れていたと霧恵は気がついた。いつもの霧恵なら、朝起きていちばん始めに六号を手に取り、天気予報と一緒にこの占いの結果を熟読しているはずだった。

蒔絵がいつか戯れに作ってやった占い機能は、今やこの六号のデータ容量の一割を占拠している。

霧恵がこの占い機能を気に入って以来、蒔絵は少しでも暇になるとこのプログラムを拡張させ続けた。古今東西の呪術や風水の本を読みあさり、そうして作成した膨大なデータベースをもとに一日の運勢とラッキーワード・ラッキーカラーを算出するそのシステムは、今や人工知能並みの計算機能を持っていた。間違いなくこれは、世界で最も優れた占いシステムだった。

そんな事は全く知らなかったものの、とにかく霧恵はこの占いの結果を病的なまでに信じている。それだけに、今日の自分が六号を家に忘れて来てしまったことは霧恵にとつてただならぬ事件だった。

霧恵は軽すぎる鞆を手を持ち、改札前の時計台の下に立っていた。六号を握ったときに感じる、逞しいボディで支えているような安心感が恋しい。

「……ほら、忘れ物」

後ろから声がかかったかと思うと、霧恵の目の前には確かに、いま自分が思い浮かべていた六号の姿があった。

霧恵はすぐに振り返らず、まずはその六号を受け取って、しっかりと握りしめた。霧恵がどれだけ強く握っても壊れそうにない、引き締まったフォルム。少女の姿とはアンバランスなデザインのそれは、しかし霧恵の手にしっかりと馴染む。あらかじめ、そういう風に設計されているのだ。霧恵がワイヤーを引っ掛けて空を跳ぶあいだも手が滑ってしまわないようになってるだけに、その指を絡ませたときの一体感は気持ち良かった。

二人はそのまま並んで立っていた。特に話す事もやる事も無かったのだ。いきなり蒔絵に「デートをして来い」などと言われても、もちろんお互いにどこか二人で行きたい所など無い。

霧恵は、横に立っているであろう知也のことは少しも見ようとしないまま、かと言ってずっとこのまま過ごしているわけにも行かないので、とにかく六号のディスプレイを開いてアプリを起動させる。膨大なデータベースの中から必要な情報が抽出され、発光する画面の中で数字の渦が巻き起こる。

霧恵はじっとその画面を眺めていたが、それでも何故か知也が自分のほうに視線を向けたのがわかった。

詳細な判断結果の画面が表示される。全く占いらしからぬ、様々なデータからの統計により出力された各項目には、律儀に出典やら算出方法までが載せられているが、それは霧恵にとってはどうでもよい話だった。とにかく霧恵にとっては、これが姉の作ったプログラム の回答なのだという信頼だけが全てなのだから。

「知也さん、青です。青い電車にしましょう！」

霧恵はそう言って知也の顔を見上げた。しっかりと整えた髪と血色の良い肌が目に入ってきて、霧恵は不思議な感じがした。服装は昨日と全く同じだったが、洗剤の良い匂いがする。

「青、か」

知也が路線図に目を向けると、青いラインの電車は島の南側——観光エリアと呼ばれる地域へ向かう路線のものだった。

島の南端を覆う人工のビーチはこの季節にはとびきりのスポットで、おそらく夕方になっても海水浴に来た客で賑わっているはずだった。周囲には他にも様々な観光施設が用意されていて、少し東へ向かえば海水を用いた大規模な実験の様子を観覧することも出来る。そんな場所なら霧恵も暇を潰せるだろうと思っ、知也は頷いた。……もつとも、知也は一度もその観光地に足を運んだことが無かったのだが。

「……いいけど、その前にちよつと服を買わせてくれよ？」

知也としては霧恵の機嫌を損ねたくなかったので、服は適当に買って済ませようと思っていたのだが、いざ適当な服屋に入ってみると、意外な事に霧恵は真剣そうな目つきで知也の服を選び始めた。

部屋の家具の事といい、霧恵はこの手の買い物が好きなのだろうとは知也も薄々感じてはいたし、霧恵の部屋のPCの履歴はインテリアとファッシュヨンの情報サイトでいっっぱいになっていると蒔絵に教えて貰ってはいたが（妹のインターネットの閲覧履歴を逐一チェックするのはどうかと思った）、まさか霧恵が他人の買い物でこれほどはしゃげる子

供だとは予想もしていなかった。

「知也さんなら、こっちのほうがいいですよ！……あ、別に知也さんがかっこいいってわけじゃないですけど」

「知ってるよ、んなこと」

とにかく、霧恵は知也が疲れ果ててしまうほどにシヨッピングを満喫したのだった。

知也は、家を出る時に蒔絵に貰った三万円のうちの半分をここで消費した。女性にお金を世話して貰うという、男としてなかなか考える所のある体験をしていたわけだが、知也は迷惑料と解釈して遠慮なくそれを受け取って来ていた。蒔絵の羽振りを見るに、どうやら芳川家の経済状況はそれほど悪いわけでもないようだった。生活や食事が質素な理由は、やはり蒔絵の思想によるものなのだろう。

荷物と霧恵の指示で、部屋まで運ぶように手続きをした。アルミナ市の運送は自動輸送機による空輸で行われるため、それほど重い荷物でもなければその日のうちに届けられることになっている。

そうして二人が外に出ると、太陽はほとんど沈みかけていた。夕方のひどい暑さも薄らぎ、涼しい風がタイル敷きの駅前広場をすり抜けていく。

「ずいぶん時間掛かっちゃまったな。……帰るか？　霧恵」

「帰るか」などと訊いておきながら、すでに知也の頭の中には帰る以外の選択肢は無かつ

た。こんな時間からビーチに行こうとするのは、宿泊目当てのカップルか家族くらいなものだった。夏とはいえ、夜の浜辺はさすがに寒いだらう。

それに何より、知也は今までずっとはしゃぎ回る霧恵に付き合っていたので疲れたのだ。自分の買い物でこれほど気が滅入ることになるとは思っていなかった。

しかし霧恵の返事はどうと、

「なに言ってるんですか。もちろん、行きます」

と言つて、全く疲れの感じられない表情で知也の前を歩く。

「……まあ、よく疲れないもんだな」

一瞬だけ知也は、妹が出来たような気分になったが、それは忘れることにした。

島の中央を走る環状線に乗り、ちょうど円周を九十度ぶん移動すると南側中央駅に到着する。なんとまあ捻りの無い駅名だ、と電車に乗るたび知也は思う。島の市営鉄道の駅は全部で五十一個に及ぶ。ちょうど東京都の五分の一ほどに及ぶ菱形の人工島には、国内の他の土地とは違いそれぞれの地に何の歴史も無いので、凝った駅名の付けようも無いのだ。島が出来たばかりの頃はネーミングライツを売って資金を稼いでいたというが、ターミナル駅に関しては分かりやすい名前が一番、ということ、この中央環状線という面白いのない名前をした路線の主要四駅の名前はそれぞれ、北側中央駅やら東側中央駅やらということになったらしい。

知也は蒔絵から渡された携帯端末を電車内の公衆無線LANに接続して、島の南側の情報を漁る事にした。この端末は、形こそ普通の携帯電話そのものだったが、中身は霧恵の持つ六号と同じように蒔絵のオリジナルだった。恐らく形状は3Dプリンターで既製品のプロダクトデザインを出力したのだろうが、そのインターフェースのデザインは他の既製品とは全く別の物だった。そして何より他の携帯端末と異なるのは、この端末では霧恵以外の誰とも直接連絡が取れないということだった。

知也が説明を要求すると、蒔絵はただ「キミは霧恵以外と話す必要はないだろ」とだけ答えた。

とにかく、知也は時おり話しかけてくる霧恵の相手をしながら、夜でも楽しめそうな観光スポットを漁って、電車が目的地に着くまでの時間を過ごした。観光情報の欄に表示された項目のほとんどに(カップル向け)と書かれているので知也はますます気が滅入った。(……隣に居るのが辻さんなら、どれだけ幸せな気分になれただろうか?)

知也は、今日も真面目に大学の授業に出席していたであろう辻あや子の姿を思い浮かべる。

やがて二人は環状線を降り、霧恵が望んだ通りの群青色の電車に乗り換えた。線路は途中から地上へと顔を出し、窓の外に静かな薄暗い夕景が広がった。あまりこの辺りには街の灯りが多くない。いつばいに高層ビルが立ち並ぶ北側に比べると、南側は緑が多く、夜

に目立つ明かりといえは海岸に等間隔に広がる灯台の橙色だけだった。
どこかで夕食を取ってから歩いて回ろうと、知也は考える。

車内モニターの時計が六時三十分を示した。画面上にはニュース番組のトピックスがいくつも並んでいたが、その中に浅香彩花の名前は無い。

二人は、手に持ったハンバーガーを時おり頬張りながら、人気の少ない海岸を並んで歩いていた。すっかり疲れていた知也はレストランにでも入ろうと思っていたのだが、霧恵は食べ歩きがしてみたいと言って聞かなかった。

「一度、歩きながらご飯を食べてみたかったです。ここって、ゴミをその辺に捨てても怒られないんですね？ すこいなあ」

霧恵が言ったのは、島の都市部を常に巡回している清掃用ロボットのことだ。富裕層であれば一家に数台が置いてあることもある一方、島の西部ではその機械は一切運用されていない。

「だからって、道端にゴミを捨ててもいいって事にはならないからな。ちゃんとゴミ箱に捨てるよ」

「分かってますよ。当たり前です」

霧恵は頬を膨らませて、あからさまに不機嫌そうな顔で知也のほうを睨んだ。霧恵には、知也がただ意地悪でそんなことを言ったように聞こえたかもしれない。だが、知也は霧恵がそれを「当たり前」だと言った事に少なからず動揺した。

知也は、霧恵が平然と言い放った「当たり前」のことさえ忘れかけていたのだから。

昨日までのことを思い返してみれば、自分は街中でゴミを散らかす事について何の疑問も持つ事が無かったのだ。ゴミは道端に捨てるのが当たり前だと信じて疑わなかったほどに。

——もともと見えていたはずのものが見えなくなる。そうして自分達の生活に疑問を持たなくするのがこの偽装化学の怖いところだ。

蒔絵との、昼間の会話を思い出す。

人間の自由な想像力を脅かし、ただの動物に変えてしまう神経毒。それはもしかしたら、偽装化学に限った話ではないのではないか？ 科学技術が発達すればするほど、人間はどこかが退化していつてしまう。そんなことを知也は思った。

ところで、日本人が西洋人と比べてよく繊細だと言われることがあるが、それには日本の文化が影響しているのだ、という話がある。

頑丈な煉瓦造りの西洋の住宅に比べ、日本人にとって壁とは非常に脆い存在だった。その壁を壊さないようにするため、日本人は日頃から繊細な立ち振る舞いをしなければいけなかった。これが日本人の気質を作った要因である——そういう話だ。

日本人はとにかく、脆い障子を破らないよう挙動の一つ一つにも気を配ったし、物音や話し声が薄い壁の外に漏れないよう慎ましやかに日々を送った。このような気質はやがて、西洋文化が入り込んで来るにつれ徐々に失われていったはずだ。我々は何かを手に入れるたびに何かを失い、見失いながら進歩を続けている。そしてそれは間違いなく、進歩でも何でも無いのだろう。

恐ろしいスピードで発達してゆくこの島は、人間を別の何かに変えてしまう場所なのだった。ここに暮らす人間たちは、生活が豊かになるにつれ何も考えられなくなっていくだろう。自分でものを考えるという事自体が出来なくなるかもしれない。

知也はふと立ち止まると、後ろを振り返って、日が落ちてでも賑わいの消えないビーチのほうを眺めた。彼らはいま、何を考えているのだろうかと思っただろうかと思っただ。あそこには、至る所にあの清掃用ロボットが徘徊しているはずだ。

「……気持ち悪いな」

知也は、食べ終わったハンバーガーの包み紙を手のひらで握りつぶす。

「なあ、本当にこっちでいいのか？ 駅の周りのほうが遊べる所も多いだろうが」
「いいんです。ちょっと歩きたかったんです」

二人は島の最南端の海辺を、東側へ向かって歩いた。この辺りの海は様々な研究実験に利用されることがあり、時おり珍しい光景を見る事が出来たが、今はただ波が打ち上げる音の他に何も無い。

このまま海沿いの道を歩いていくと、そのうち別の路線の駅が見えてくるだろう。そうなれば、周辺には知也の知る限り大した建物もないはずだった。

二人はゆっくりと、広い歩道を並んで歩く。他人の気配は全く感じられず、木の葉が風に揺れる音だけが聞こえてくる。浜辺の賑わいはもう遠くへ消えてしまつて、時間が経つにつれ辺りの景色がだんだんと明るみ失っていく。

「どこまで行く気だ？」

霧恵は何も答えず、ゆっくりと海沿いの道を歩いていく。遠くには灯台の明かりが揺らめき、水面の折り重なつて踊れる表情をほんやりと照らした。車道をコンパクトカーが一台走り抜けると、風圧でその髪は微かに靡き、その毛先は白金のように眩しく煌めく。

霧恵は両手の指を後ろ手に組んで、その海と空の溶け合う先を眺めながらゆっくりと歩いた。月ははっきりと輪郭を表し、どこまでも白くブルシアンブルーのキャンバスを飾つた。

海は本物だろうか。

知也はふと、そう考えた。この島で、それが明らかに本物の姿だと分かる物は少ない。

どれだけ美しいものを見ても、ある瞬間には、それが偽装された物なのではないかと疑つてしまう。

食べ物、植物、風景、それから、人間も。それらは全て本当の姿なのだろうか、と考えることが知也にはよくあつた。

俺自身の感情は本物なんだろうか。そのことを考えている俺は本物なんだろうか。

あるいは、横にいる霧恵は本物なんだろうか。その肌は、その髪は、その目は、その言葉は嘘ではないのだろうか。霧恵はどこまで俺に本当の事を話しているのだろうか。

あるいは、霧恵を助けたあの時の、俺の衝動は本物だったのだろうか。

蒔絵は、俺が霧恵を助ける事を最初から見抜いていた。それなら、俺のあのときの行動には確かな理由があつて、それはつまり俺の純粹な意志でもなんでもない。俺はただ自分で何も選ぶ事も無く、それに導かれるままにこんな海を眺めている……

「霧恵。……お前は本物なのか？」

「なに言ってるんですか？」

知也が問いかけると、霧恵は振り返つて、そう聞き返して来る。それから、白くさらさらとした指で知也の腕に触れた。

「私たちは本物です。間違いありません」

この感触は、この柔らかなさは、この熱だけは本物のだと、知也は信じたくなつた。

——だって、これが本物で無ければ、いったい俺はこの島の何を信じればいいんだ？

ふと、海の向こう側からゆつくりと、アラームのような電子音が聞こえてくる。二人は足を止めて、並んで海のほうを眺めた。

水平線の向こう側に白い線が走ったかと思うと、それは段々と大きな光の球体となって辺りの水面に広がった。金属のような白い光は一瞬のうちに広大な海の一面を覆い尽くし、二人の視界の下半分を覆い尽くした。シャボン玉に輝く光の乱反射のように、それはピンクからブルーへ、そしてカラーサークルを駆け回るようにあらゆる色相へと移り変わっていく。それらの色は半透明に積み重なり、何重にも積み重なったレイヤーが万華鏡のように目まぐるしく色彩を描き出す。

その色の一つ一つは、二人に何かを残す事無く一瞬にして消えていった。それらは何の意味も残す事はない。何の意図も持たないその色は、それだけに何の嘘も持たない。

「来てみて良かったでしょう？」

霧恵はそれを眺めながら知也に言った。

二人はガードレールの上に腰掛け、その光が消えるまでじつと海を見つめていた。これは一体何の実験なんだろうか、と思った。きつと彩花に訊けば答えてくれるだろう。というより、訊くまでもなくあの時の彩花はそれを話してくれるはずだった。一日が過ぎた今でもはつきりと思いつける。十六時三十分の夕景の中、彩花に連れられて眺めたあの光。

しかし、そんな彩花の時間を遮ったのは窓から飛び込んで来た霧恵だった。

あの時霧恵が来ていなかったら、彩花は自分にどんな話をしていただろうか。これがいったい何によってもたらされた光なのか。彩花が自分の事をどうしようとしているのか。

結局知也は彩花の元から逃げ出し、彼女の事を妨害しようとする芳川蒔絵のもとに居る。

「霧恵。お前は どうしてあいつのやる事に協力するんだ？」

光が消え、海がまた暗闇の中に溶けてしまうと知也は霧恵のほうへ向き直った。

「話ほだいたい聞いた。蒔絵が何をやっているのかも。だが俺は、あいつのやる事もどこか、間違っているんだと思う。たかが人間一人の力で、この島が変わると思うか？ ……」

そんなことにお前が協力する必要なんてないだろうが」

確かに知也は、蒔絵の話に納得はしたし、妨害工作に十分な技術力が彼女にある事も理解はしていた。そして今や、彼女の手にはランドセルがある。

しかしそれでも、この島で行われているあらゆる欺瞞を取り去る事など不可能に思われた。それはもう、島全体のあり方そのものを変えるのとほとんど同じ事だった。

そもそもここは、国から特別に指定された実験都市であって、その高い技術力によって普通の警察機関ではろくに犯罪を取り扱えず、諸々の研究を許可する倫理審査委員会が警

察機関を持ち、その科学力をもって自治を取り持つような場所なのだ。それだけに、悪い噂が絶えないのも当然だった。

果たして芳川姉妹は、自分たちのやっている事がこの機関に知られればどうなるか、理解しているのだろうか。ランドセルを手にしてしまつた今、彼女たちは間違いなくただの犯罪者だった。浅香彩花がひとつ指示を通すだけで、島中のありとあらゆる人間が二人の敵になるだろう。そうなれば、入出島にさえ許可のいるアルミナ市でまともに暮らしているはずはない。そして捕まってしまうば、彼女たちがどうなるかもわからないだろう。

「霧恵、お前は別に、蒔絵に協力してあんな危険なことをする必要はないはずだろ。それとも、あいつに脅されてるのか？ 無理やりに手伝わされてるなら、そう言ってくれ。俺が何とかするから」

霧恵に恐怖はないのだろうか？ 昨日も、知也に助けられるまで霧恵は本気で蒔絵に見捨てられたと思つたはずだ。涙まで流して震えていた霧恵が、この期におよんで蒔絵に協力する意味があるのだろうか。

知也は、蒔絵が霧恵の事を脅しているのだと思つた。そうでなければ、自分は家に籠つたまま、霧恵にばかり危険な工作などさせたりはしないだろう。

しかし、霧恵は相変わらず知也のほうを向いたまま、歯を見せて笑つた。

「だって私、お姉ちゃんのこと好きですから」

そう言う霧恵の言葉には少しの濁りも無いように思われた。

「昨日のことも。お姉ちゃんの手伝いがしたくて、私のほうから頼んでやらせてもらったんです。お姉ちゃんは私の事をちゃんと守ってくれて分かつてたから」

「でも、あの人のやる事は間違つてる」

「知也さん」

霧恵は知也の前に立つ。背後の車道は時おりトラックや乗用車が通り抜け、そのたび霧恵の髪や、夏服のスカートを揺らした。

「間違つてるから、何だって言うんです？ これが間違つたことだとしても、私はぜんぜん構わないんです。だって私は、お姉ちゃんが正しいことを言っているからお姉ちゃんを好きになつたわけじゃない。私の大好きなお姉ちゃんの言う事だから、それが間違つても信じられるんです。」

正しいことを言っているからその人を好きになるなんて……不幸じゃないですか。好きになるのに理由が要るなんて。そんなの、嘘じゃないですか。私はお姉ちゃんが好き。だって、家族ですから。私は、世界中の誰もがお姉ちゃんのことを否定しても、それでも側に居ます。それが、好きってことでしょ？」

その時知也にははつきりと、人間の引き出す力の根源を垣間見ていた。霧恵のまつすぐな行動の原理には、姉への盲目的な信頼があつた。その信仰は、霧恵の地を踏む足をしつ

かりと、揺るぎない植物の幹のように支えて離さない。

誰もがそういう信頼を楔のように突き刺しているのだとしたら？ 知也にはそれが無かった。知也は嘘に溢れたこの島に居て、信頼するべきものがなかったのだ。……もし、それを手に入れることが出来たら？

「霧恵。お前は本当に、本当のことしか言わないでいてくれるのか？」

知也はまっすぐに霧恵を見た。

あの時霧恵を助けたように、俺が例えば霧恵のために生きるとしたら。霧恵が蒔絵のことを信頼するように、俺が誰かの事を信じる事が出来たら。

霧恵にはそれをするだけの強さがあるように思えた。

「私は本物です。嘘じゃない」

霧恵ははつきりとそう言った。知也の両腕を掴んで、しっかりと知也の目を見たまま、その眼差しは波一つ立てる事無い水面のようだった。

知也のこの時の気持ちには言葉で説明出来るほどの理由など無かったが、確かに今この瞬間に知也は、霧恵のことを絶対的に信頼しきっていた。

だいいちこの世界に、絶対に本当だと言えるような真実などあるだろうか。そんなものがあるなどと証明する事は誰にも出来ない。だからこそ人間は、どんな嘘でも真実だと思いつつも事が出来る。人間はありもしないものを、自分の心の中に真実として書き出す事が

出来る。だから、人間の可能性は限りなく無限に近い。彼がそれを信じるだけで、彼の世界は一瞬にして色を変え、全く別の物に変わっていくだろう。それは間違いない、世界を作り替える事に他ならない。

この世界には真実など無いからこそ、人間は自分の信じる世界を、そこに真実として描き出すことが出来る。自分だけの嘘を現実に変える事が出来る。

そして、それが出来る人間はきっと幸福なのだろう。

知也の世界は、霧恵によってその瞬間、確かに変化の兆しを見せていた。